女性のライフステージと年齢観

昭和６１年３月

・有職度が高い方が若く見える
・年下に見られる人は年齢を偽り、年上に見られる人は本当の年を言う
・中年イメージ・高齢イメージが高齢へシフト
・女性の人生の節目
　30～34歳――恋のおもいで
　35～39歳――生活感
　40～44歳――体の衰え
　45～49歳――孤独の始まり
・全世代がモラトリアム化

ポーラ文化研究所

調査の動機

日本人の平均寿命は伸び、人生80年時代を迎えた。

女性のライフステージも子供の独立等で母親としての役割が一段落した後、高齢に至るまでの数10年という長い期間に新しいライフステージができ、そこをどう生きるかがこれからの高齢化社会に向かっての大きな問題とされている。また、働く女性は年々増加を続け、その過半数は既婚者であることも衆知の事である。

このように変わりつつある社会環境の中で、女性の社会進出も一時のブーム的な時期を過ぎ、じっくりと自分の将来を考えて行動するようになってきた。そこで、中年期を迎えた女性たちは今、自分のステージをどのように生き、将来ステージをどのように夢みているのか。その本心を探り、女性の人生観を通して高齢化社会を展望するために、女性の年齢観に関するアンケート調査を実施した。

調査目的

女性の「年齢」に対する意識の変化を通して、その裏にある社会観、人生観、自分の生き方についての考え、将来の展望等を探り、妻・母としてだけでなく、女性としてのステージ（特に子離れ後のステージ）を規定するものと、中高年期の女性と社会との関わり方を探る。

調査方法

・アンケート調査（留置法）
・調査対象者……首都圏に住む30代、40代の女性 129名
・調査期間……60年10月25日～11月 5日

調査の結果の概要

1．調査対象者の属性

調査対象者 129名の属性を下に示す。45～49歳のサンプル数が少なく、既婚（子供あり）が85.3％を占め、調査全体がこの層の調査というような結果となっていることに特に注意しておいて頂きたい。

年　齢		
30～34歳	30人	23.3%
35～39	37	28.7
40～44	44	34.0
45～49	17	13.2
不　明	1	0.8
	129	100.0

世　帯		
未婚	12人	9.3%
既婚（子供なし）	7	5.4
既婚（子供あり）	110	85.3
	129	100.0

職　業		
パートタイム	31人	24.0%
フルタイム	36	27.9
無　職	60	46.5
不　明	2	1.6
	129	100.0

2．若く見られる属性は

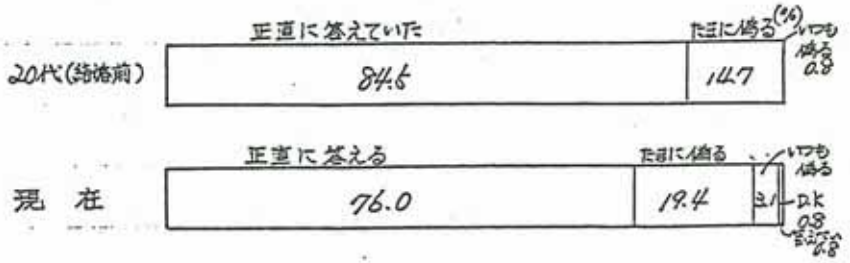
初対面の印象は、未婚者が年下に見られる率が高く、既婚（子供なし）、既婚（子供あり）の順に年上に見られる率が上がる。職業的には、フルタイムが年下に見られやすく、パートタイム、無職と年上に見られる率が上昇し、いわゆる“所帯やつれ”を感じさせる。

世帯	年上に見られる	年相応に	年下に見られる	不　明	計
未婚	0	1	11	0	12人
		8.3	91.7		100.0%
既婚（子供なし）	0	3	4	0	7人
		42.9	57.1		100.0%
既婚（子供あり）	16	48	43	3	110人
	14.6	43.6	39.1	2.7	100.0%
計	16	52	58	3	129人
	12.4	40.3	45.0	2.3	100.0%

職業	年上に見られる	年相応に	年下に見られる	不　明	計
パートタイム	3	11	15	2	31人
	9.7	35.5	48.3	6.5	100.0%
フルタイム	2	14	19	1	36人
	5.6	38.9	52.7	2.8	100.0%
無　職	10	26	24	0	60人
	16.7	43.3	40.0		100.0%
不　明	1	1	0	0	2人
	50.0	50.0			100.0%
計	16	52	58	3	129人
	12.4	40.3	45.0	2.3	100.0%

3．年齢を正直に答えるときと答えないとき

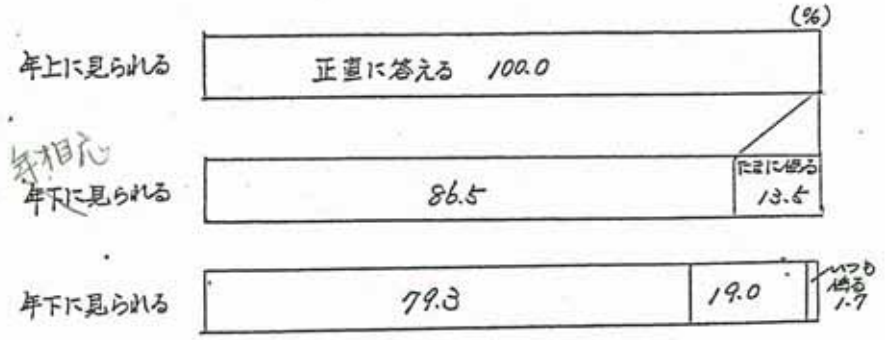
女性が自分の年齢を聞かれたとき、本当の年齢を素直に答えているだろうか。以前に比べて最近の女性は、自分の年齢を隠さず答えるようになってきたと思われるが、それでも時と場合によっては偽ることがある。そこで、20代（結婚前）と現在とに分けて、自分の年齢を聞かれたとき、どう答えているかを調べた。



全体的には、結婚前の20代の頃には正直に答えていた人が多く（84.5％）、これに対し30～40代の現在では正直に答える人は76.0％になる。

3-1　20代（結婚前）の頃

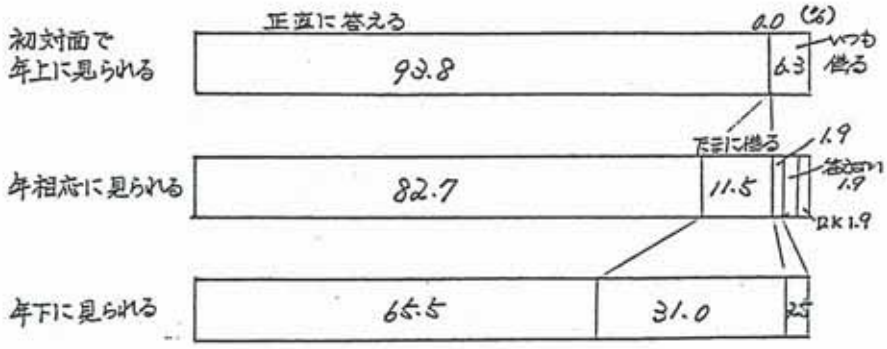
ここでおもしろいのは、初対面のときに相手からどう見られることが多いかによって、自分の年齢の答え方に違いが見られることである。



実際の年齢より「年上に見られることが多い」人は 100％「正直に」答えている。これに対し「年下に見られることが多い」人は、20％強の人が偽ったことがあると答えており、ここにも「本当は若いのよ」「若く思わせておきたい」という心理が働いているといえよう。

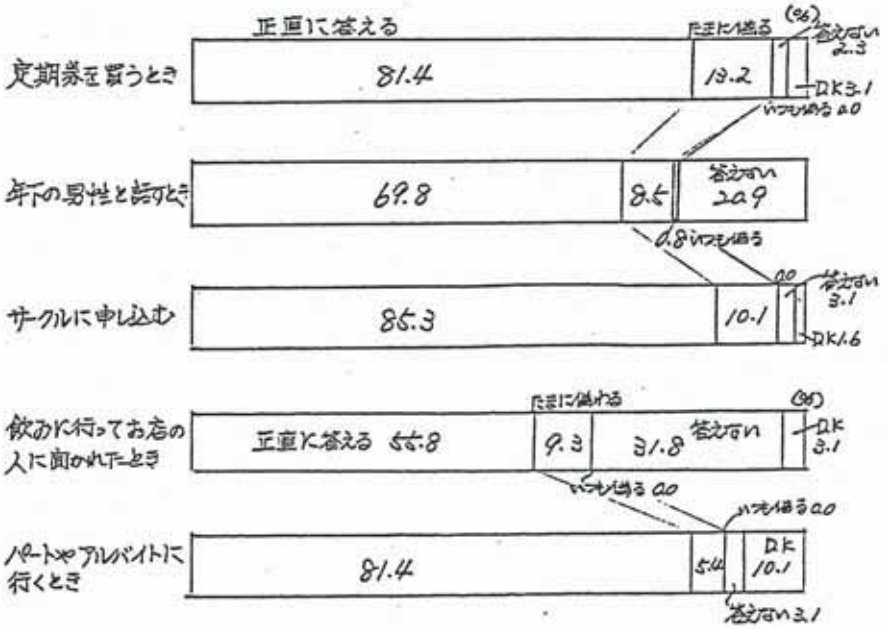
3-2　現在

初対面で年上に見られるか年下に見られるかでみると、やはり、年上に見られることが多い人は「正直」に答えた人が多く、年下に見られる人に「偽る」人が多い。その割合は、20代の頃に比べると全体的に「正直」に答えた人が減り、「偽る」人が増えてきている。特に年下に見られることが多いという人は３人に１人が「偽る」と言っており、「若く見られたい」「若く思わせておきたい」という心理が、20代の頃より、30代、40代になってからの方が更に強く働いているということであろう。



3-3　こんな場面ではどう答えていますか

では、一般論ではなく、日常的にちょっと年齢をごまかしやすい場面をいくつか設定して、それぞれの場合について、自分の年齢をどう答えているかを調べたのが次のグラフである。



ここでは、自分で書類等に書き込む場合（定期券、サークルの申し込み、パート等）と、口頭で答えてすむ場合（年下の男性と、飲みに行って）を設定した。

全体的に見ると、やはり「定期券を買うとき」や「サークルの申し込み」「パートやアルバイトに行くとき」は80％強の女性が正直に答えるといっているが、「年下の男性と話すとき」「飲みに行ったとき」は「偽る」よりも「答えない」という女性が20～30％と大幅に増えることが示されている。つまり、「別に正直に言う必要がない」ときには言わずに過ごしてしまう。「その場限りのことだから」ということである。また、「たまに偽る」と答えた人の中では、その理由を「冗談で」「そう思い込むと若返る気がするから」などがあげられていた。

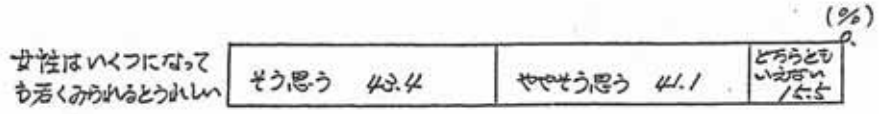
パートやアルバイトで「たまに偽る」と答えた人の中に「年齢制限があるから」という理由をあげた人があったが、30～40代の女性が仕事に就こうとするとき、この年齢制限が一つの障害になっていることがわかる。

4．30代、40代女性の“年齢観”　――年齢にこだわらない傾向

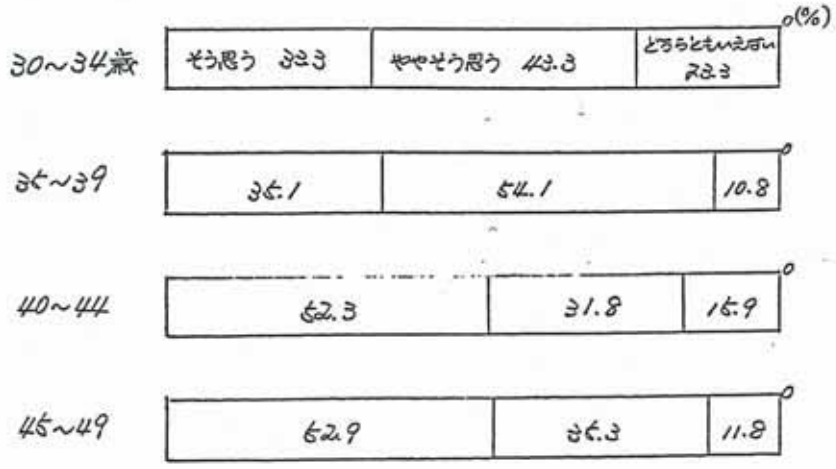
女性と年齢については、いろいろな側面からその関連がいわれてきているが、女性の社会進出等の時代的変化にともなって、年齢に関する意識がどうなっているかを調べた。

4-1　女性はいくつになっても若く見られるとうれしい

「そう思う」43.4％、「ややそう思う」41.1％、「どちらともいえない」が15.5％で、反対する意見はゼロ。だれでも「若く」ありたい「若く」見られたいという願望を強くもっていることがわかる。

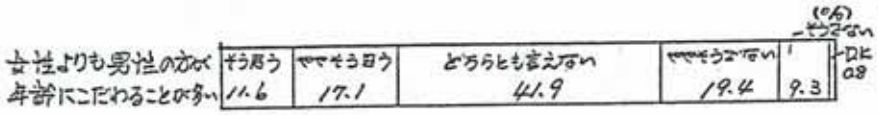


この結果を年代別にみると、そう思う人が30代より40代が約20％も多くなっており、高齢に近づくほど「若くありたい」という願望が強くなることがわかる。



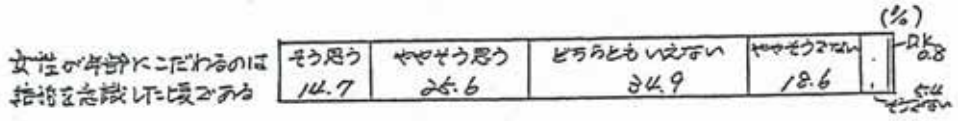
4-2　女性より男性の方が年齢にこだわることが多い

「そう思う」（11.6％）と「ややそう思う」（17.1％）を合わせると28.7％、「ややそうでない」（19.4％）と「そうでない」（9.3 ％）を合わせるとやはり28.7％で、ちょうど意見が半々に分かれた結果になった。「どちらとも言えない」が42％ということからも、男性も女性も同じように“年齢”にはこだわっていると女性は見ている。



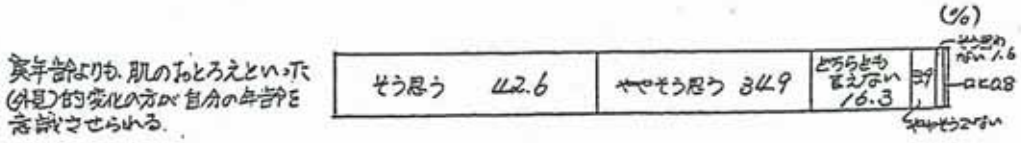
4-3　女性が年齢にこだわるのは、結婚を意識した頃である

「そう思う」と「ややそう思う」とを合わせて40.3％となり、やはり女性の人生で大きな転換期となる結婚とその時の年齢とは、大変関心の高い問題であるといえる。“適齢期”という言葉が、今でも若い女性の関心の的になっていることからもうなずける結果といえよう。



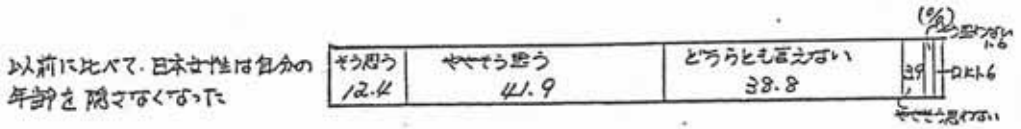
4-4　実年齢よりも、肌の衰えといった肉体（外見）的変化の方が自分の年齢を意識させられる

「白髪が出てくる」「肌が衰えてくる」「老眼鏡が必要になる」といった肉体的変化は、いや応なく自分の年齢を意識させられる事柄である。　今回の結果からも「そう思う」「ややそう思う」という肯定派の意見が77.5％と大多数を占めており、否定意見はわずかに 5.5％である。



4-5　以前に比べて、日本の女性は自分の年齢を隠さなくなった

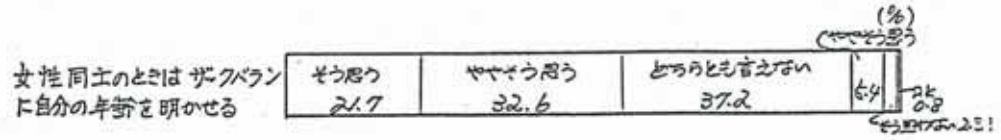
今回の調査結果でも、自分の年齢を聞かれたとき正直に答える女性が76.0％であったように、現在の女性はかなり年齢を隠さなくなってきたといえる。この項目についての答えは「ややそう思う」という意見が41.9％で一番多く、「そう思う」と合わせると肯定派が過半数を越えている。つまり、自分が正直に答えるだけでなく、一般的にみても女性が自分の年齢を隠さなくなったと認めているということである。因に、否定意見は 5.5％であった。



4-6　女性同士のときは、ザックバランに自分の年齢を明かせる

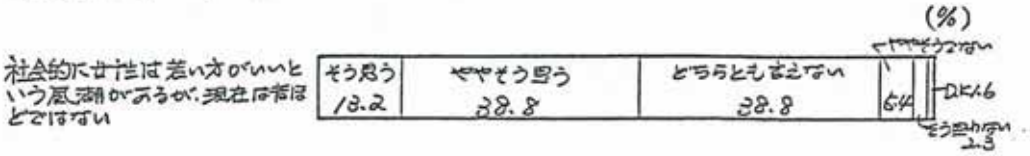
女性は女性同士のコミュニケーション社会を作りあげている（「女性の群れ意識に関する調査」59年 1月報告）という調査結果からも明らかなように、女性は女性同士の方が、何かと行動しやすいという気持ちがある。そこで“年齢”についても、男性がいる場合といない場合とでは、その答え方に違いがあるのではないだろうか。

結果を見ると、やはり肯定意見が半数を越えて支持されている。



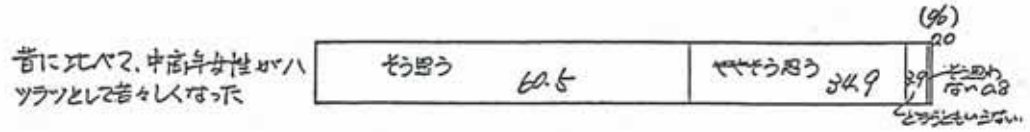
4-7　社会的に女性は若い方がいいという風潮があるが、現在は昔ほどではない

約半数の女性が「そう思う」「ややそう思う」と肯定している。「どちらともいえない」が38.8％で、否定意見は 7.7％にとどまっている。このことから女性の意識の中で“若さ”へのこだわりも少しずつ変わっていくことも考えられるであろう。



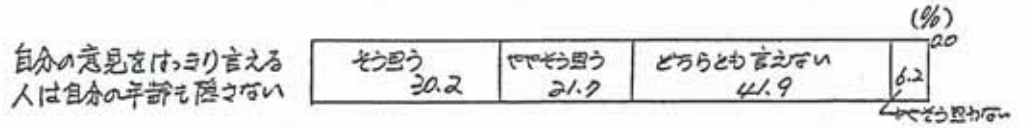
4-8　昔に比べて、中高年女性がハツラツとして若々しくなった

この問いに対する答えは、「そう思う」という積極的肯定派が60.5％、「ややそう思う」は34.9％を圧倒的多数でこの意見は支持されたのである。彼女たち自身のことでもあり、そうありたいという願望がこめられているのかもしれない。



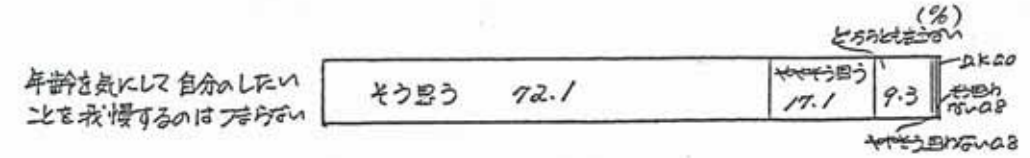
4-9　自分の意見をはっきり言える人は、自分の年齢も隠さない

この問いに対する答えも、やはり過半数の人が肯定意見であった。しかも「そう思わない」「わからない」という人はゼロである。やはり、自分自身の考えで行動できる、自分の考えをはっきり言えるということは、自分を偽らずに生きていくことができるということであり、中高年に限らず女性が“自分の”人生を歩んでいく上でとても大切なことであろう。



4-10　年齢を気にして自分のしたいことを我慢するのはつまらない

「そう思う」という積極的な肯定派が72.1％を占め、「ややそう思う」（17.1％）を合わせると89.0％の高率となっている。こうしてみると、30代、40代の女性は、これからの自分の人生は、“年齢”を気にせず、自分の人生を活々と生きていきたいと考えているといえるのではないだろうか。



５．中高年イメージの年齢が上昇

現在、30～40代の女性は、自分の将来展望をどのように描いているのだろうか。その手掛かりを知る一つの手段として「中年」「高齢者」などについて何歳くらいをイメージしているのか。また、かつてイメージしていた年齢と現在イメージしている年齢とは違っているかどうかを調べた。

その結果（全体平均）を見ると、

・女性の中年のイメージ	かつては37.3歳以上 いまは　44.8歳
・高齢者のイメージ	かつては58.6歳 いまは　69.0歳
・一人前の女性とは	かつては25.7歳 いまは　28.8歳

と、いずれも、かつてに比べて今の方が高齢にシフトしている。特に「中年」や「高齢者」のイメージは 8～10歳と大幅に高くなっている。彼女たちにとって、かつては「中年」といわれていた年齢ではあるが「“中年”なんてとんでもない、まだ 5～ 6年は先のことよ」という気持ちが、ありありと読みとれる。同じように「高齢者」も60歳は序の口、人生80年時代だから70歳くらいになって初めて「高齢者」と認めたい。自分たちもそれまでは現役で頑張りたいという心意気とうけとれる。

一人前の女性というイメージも、かつてに比べ３歳程アップして28.8歳になっている。「熟女」という呼び名もあろように、ただ若いだけでなく人間性までも含めて内実ともに充実する30歳前後が「一人前の女性」であるという認識が、一般女性の間にもできあがってきているのである。次に年代別に分けてそのイメージの変化を見る。

6．女性の人生の節目――年代を通じ結婚出産が最大の節目

あなたの人生で、人生観や生活意識に大きな変化を与えた（節目を感じた）のはどんな時ですか。２つ選んで（　　）の中に書き込んでください。

上記の設問への回答の内、複数の回答のあったものを多い順に、年代別に整理した。

30～34歳	結婚	19人
	出産	19
	恋愛	3
	失恋	3
	社会人になる	3
	自分の病気	3
	成人式	2

35～39歳	出産	21人
	結婚	15
	卒業式・社会人になる	4
	自営	4
	仕事・就職	2
	大学入学で自活	2
	生活環境の変化	2
	日常的に化粧	2
	女の厄年	2
	親の死	2

40～44歳	結婚	26人
	出産	20
	病気	5
	女の厄年	4
	体型のくずれ	4
	老親の世話	4
	成人式	3
	再就職	3
	恋愛	2
	更年期	2
	白髪	2
	自営	2
	お肌の曲り角	2

45～49歳	結婚	10人
	出産	6
	子供の結婚	3
	病気	2
	夫との離別	2
	老眼鏡	2
	社会人	2

女性のライフサイクルの中で、結婚と出産はどの年代でも最大の関心事である。しかし、その次に多い回答を見てみると年代ごとの特徴が見られる。

30～34歳では、恋愛・失恋が登場し、この年代がまだ青春のイメージを色濃くとどめていることを感じさせる。

35～39歳になると自営など職業に関連したものが強く意識され、生活感やバイタリティを感じさせる。

40～44歳になると一転して、病気や体のおとろえが強く意識され始める。

45～49歳では、子供の結婚や夫との離別など、孤独な“思秋期”のイメージが早くもチラつき始める。

7．まとめ

本調査は子供のある既婚者を中心としたものとなった。そして、比率は低いが「年下に見られやすい人ほど年齢を偽る」傾向に見られるように、少しでも若く見られた方が良いという傾向が見られ、実年齢より若く見える程度は未婚、既婚（子供なし）、既婚（子供あり）の順に、そしてフルタイム、パートタイム、無職の順に低下する。つまり、いわゆる「所帯じみる」「ぬか味噌くさくなる」という現象が現われている。いいかえれば、結婚、退職、出産、子育て、子供の成長、再就職といった女性のライフステージによって実年齢と見かけ年齢の差が変動するわけである。

ところで、全体的には年齢のこだわりが非常に減少しているように見えるが、年齢を若く偽る少数の人は遅れた人なのだろうか。

そうではなく、“若い”ということの価値はむしろ「健康ブーム」などと関連して、より高く評価されているのだはないだろうか。「年齢にこだわらない」のは「若さ」を否定するからではなく、実年齢にかかわらず、「まだまだ若い」という意識の現われではないだろうか。

このことを証明すると同時にこのことを保証するのが「一人前」「中年」「高齢者」等のイメージの高齢化現象である。これらのイメージを高齢側にシフトさせることは、自らの年齢を相対的に「若く」することになる。つまり、イメージの高齢化は平均寿命の高齢化という物理的な条件だけでなく、「若くありたい」という心理的な要素も作用しているのである。

先に述べたように、人生の節目を経験する中で、40代前半で体の衰えを感じ、40代後半で孤独な思秋期のイメージを漂わせるという事実があるが、それらは、人生40年時代の１年と比べ人生80年代の１年の重みが少なく感じられやすいのと同じように、寿命の高齢化とそれにともなった中年イメージ、高齢イメージのシフトによって、事実としての重みが相対的に希釈される。

イメージの高齢側へのシフトが人生の節目の意味を希薄にし、そのことが老化の自覚を弱め、巡って再びイメージの高齢シフトへつながるだろう。

言い換えれば、平均寿命の伸び、中高年イメージの高齢シフト、年齢意識の希薄化が同時に進行していると考えられる。そしてこの事態は、少し前に言われた青年のモラトリアム現象とよく似た事態であり、モラトリアム現象も高齢化していると考えられる。

以　上